へるであらう。

最後に一言して置き度い。field geologist と共同研究を行ふ機會少なかりしため、恰かも磨かれざる玉の如き觀ありしマルチン苦心の研究も fieldgeology の進捗と共に眞價を認められつゝある故、やがては陸離たる光彩を放つ時が來るであらう。（完）

（附記）曩に紹介せる「ボルネオ第三系」の註（昭和十年三月號）としてクークースの命名者並に最初の使用者を R. A. Arthur とせしは筆者の誤謬なりし故、之を取消し同時に筆者の粗漏を陳謝す。

濃尾平野に於ける社寺の分布

鏡味完二

一、序
二、神社の分布
三、佛閣の分布
四、神社と佛閣との分布上の異同
五、附說

一、序

濃尾平野の聚落の研究を志して居る筆者が先づ聚落と社寺との關係を知り度いと思つて、社寺の對聚落位置を基としての社寺の分布を調査したのが此の拙文である。從つて本稿は筆者の濃尾平野の聚落の研究に先行する事にならうと思ふ。

然し此の拙文は其の大部分が、昭和九年測圖五萬分の一陸測圖上の讀圖であつて、自身の都合で必要な個所の巡檢が躋んでない。其れ故主

として讀圖から得た豫察的記載を試みる事が出來るに過ぎない。其れにも拘らず敢へて此の紙面を借り樣とするのは、先づ大方の御教示を待つて研究の方向を誤らない樣にしたいと念願するからである。

此所に濃尾平野として考へた地域は、第一、第二、及び第三圖に示す樣に、天白川と町屋川間の沖積層並に洪積層の平野であつて、愛知・岐阜・三重の三縣に跨り面積約一六五〇方粁で略々楕圓形の地域である。

第一圖及び第二圖は五萬分一陸測圖に記入されて居る社寺の記號を抽出して作製したものである。但し二三の大きい社寺では記號が無くて建築物の形と社寺名とで示してあるものも有つたが此れも加算した。そして便宜上此所では社寺の數と其の分布とだけに就て種々氣の附いた諸點を記述し度いと思ふ。

社寺は共に之を夫々次の三型に分類した。即ち左の樣である。

第一型　聚落に對する內在的位置を占める社寺。

社寺が聚落の全く內部に存在する場合、並に其れが聚落の緣邊に存在するも聚落の隅角に在る場合と、社寺が社寺以外の部落の一部分と共に聚落の突出部を形成する位置に在る場合とを除いた位置を占める場合。

第二型　聚落に對する緣邊的位置を占める社寺。

社寺が聚落の隅角に存在する場合と、聚落外に在るも聚落への最も近い部分に對する直距離に於て百米以內に分布する場合。

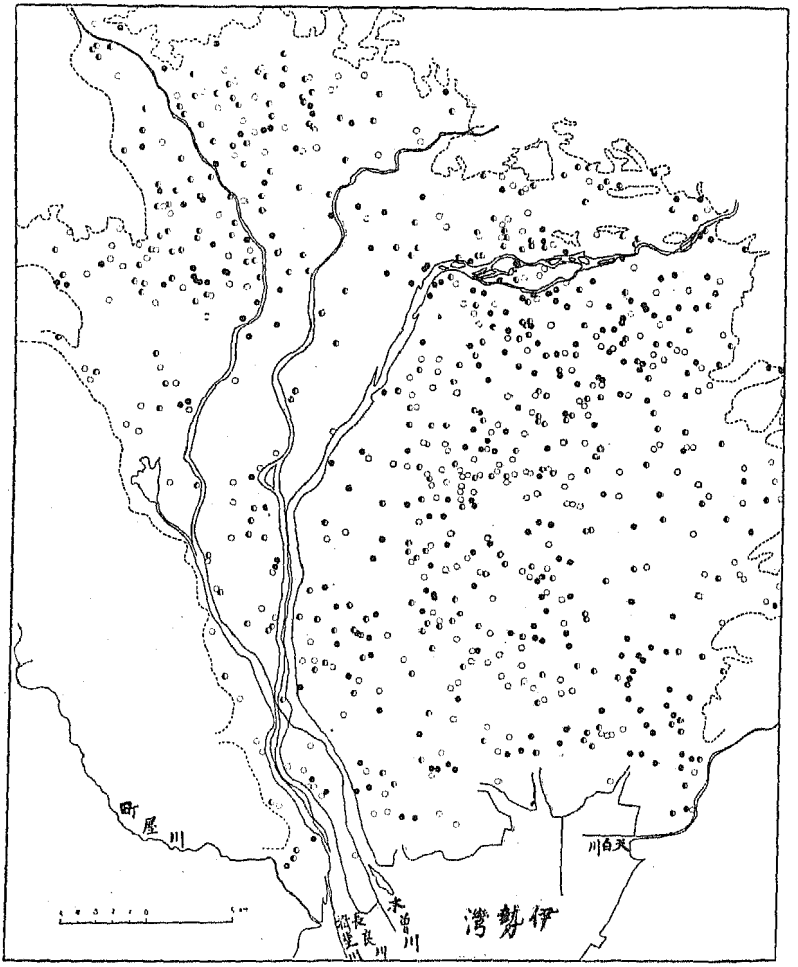
第三型　聚落に對する離隔的位置に在る社寺

社寺が聚落への最も近い部分に對する直距離に於て百米を超過する位置に在る場合。但し社寺と聚落との間に道路の有る場合は其の道路幅を加算せず、道路に代ふるに水路を以てする場合水は路幅を加算する。

尙何れの場合も學校、研究場等の公共建築物

第一圖　神社の分布

黑　點　　聚落の内部に存在する神社
半黑點　　聚落の緣邊に存在する神社
圈　點　　聚落の外部に存在する神社



や工場の敷地等は右三型の分類に關する限り聚落の一部分と考へなかつた。

二、神社の分布

第一圖に附而之を觀るに長良川の河道一帶に少く、大垣以南の所謂輪中地域に最も少い事を知る。即ち笠松町以南、木曾・長良兩川の合流點に至る木曾川河道西と同緯度間の揖斐川以東との間の低濕地では僅かに數個の分布を見るに過ぎない。

高密度分布は大垣以北の美濃平野北西四分の一の地域と、起(オコシ)から萩原・佐織・神守を經て熱田に到る線以北の尾張平野と津島及び其の近傍とに見られる。

概觀すれば平野全體は輪中地域と其の北東方向の延長地域に依つて、二つの高密度地域に分たれて居る事を知る。

都會地には割合に少く、一の宮市を中心とした蔬菜畑の分布密度の高い農村に最高の密度を示して居る。此の地域は尾張平野では實に現住民祖先に依る開拓[1]の先驅をなした所で、農業と神社とは離れる事の出來ない關係[2]に在り人口も稠密である。津島町及び其の近傍の高密度分布に就ては、津島町が津島神社と密接な聚落發達の關係に置かれて來た事から想像すれば、必ずしも不可解な分布現象とは考へられない。

(1) 相山・鏡味　尾張の蔬菜畑　昭和十一年三月　地理學評論

(2) 森德一郎　尾張大根切干發達史　昭和十年

熱田神宮を中心とする名古屋附近も此れに類似した神域(假稱)を形成して居る。尙、大垣以北の平野の高密分布は、或は尾張一の宮近傍の樣な平野開拓史から說明され得るかも知れない。

聚落發達の比較的新しい歷史を持つて居る伊勢灣岸地方に案外神社の多い事は、第二圖佛閣分布圖上同地方に佛閣分布の比較的少い事と較べて見ると興味ある現象である。之に對して他の事情を論外に置くならば新墾地[3]には神社が佛閣よりも先行して新聚落に隨伴する場合が多いのではなからうかと思はれる。

次に對聚落位置別の神社の數を見ると次の樣である。

（表一第）

第一型	二四一個	三一％
第二型	二四八個	三二％
第三型	二九八個	三八％
計	七八三個	一〇一％

局部的には各型の多少偏在分布が有るけれども概して三型共混在分布の形をとつて居る。第三型の高率な事は恐らく神社分布上の一大特色である。此の事に就ては佛閣との關係上改めて後述する所である。

(3) 最後に掲げた附說參照。

三、佛閣の分布

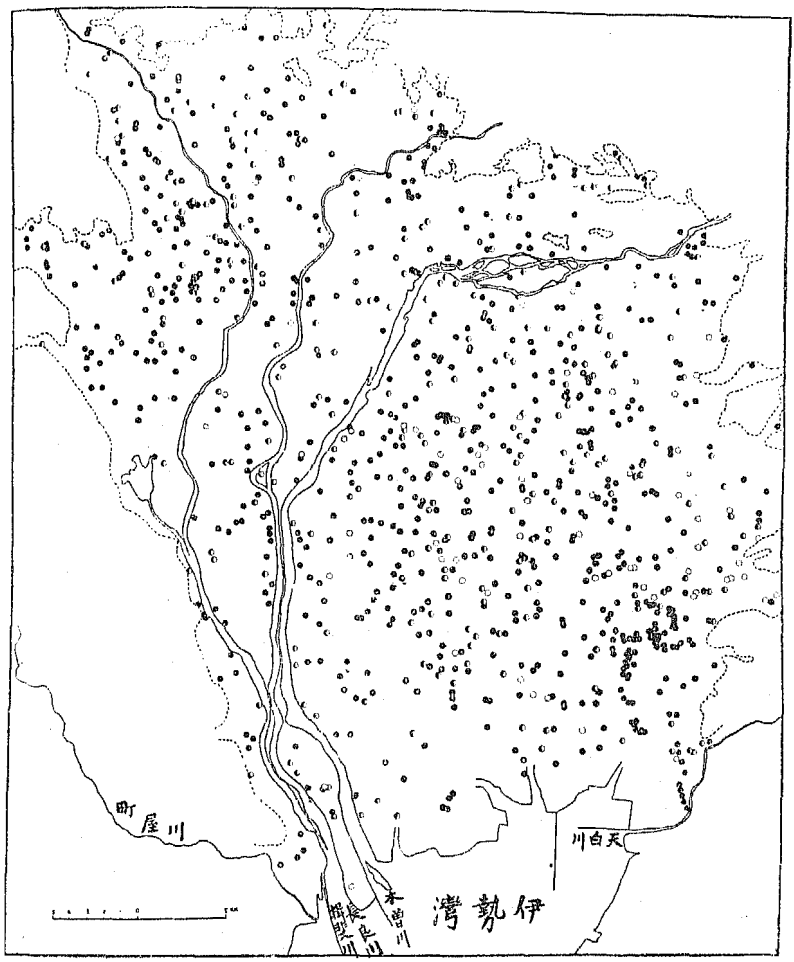
第二圖を觀ると輪中地域及び其の東北方延長地域を境として佛閣の二大群を發見する事、第一圖の場合と同樣である。此れを稍々仔細に注意すると、大垣以南では神社が少なかつたけれども佛閣は多く、名古屋市の北方の平野にも同樣の關係を觀る事が出來る。

尾張の高密度分布地域の形態は、神社の場合と極めて類似し、何れも人口密度の形態と似て居る。唯々名古屋市北方の平野では、神社と人口密度との間に相異の有る事は前述の通りであるが、此所では神社の方がより人口密度に從つて居る。此の地方での佛閣數の神社數超過に關しては種々の理由があらうが、此の地方が低濕地なるにも拘らず古くから尾張の政治中心に近く、又一度は政治中心であつた歷史的事情を想ひ起すに止めよう。大垣の南北高密度地域は人口密度とは關係が多くない。

次に佛閣は都會地殊に城下町に多い傾向が認められる。名古屋市に最も多く大垣・岐阜・犬山等が之に次いで居る。都市では佛閣が軍事的意義を持ち寺町を形造つた樣な關係から、極端に其の密度が高くなつて居る場合を指摘する事が出來る。苅安賀（一宮市の西方）岩倉の兩地は歷史的に古い町で佛閣異常に多く、地方農村に於いて史的異彩を放つて居る。

第二圖　佛閣の分布

黑　點　　聚落の內部に存在する佛閣
半黑點　　聚落の緣邊に存在する佛閣
圈　點　　聚落の外部に存在する佛閣



右に述べた都市以外では、神社に比してより散在の傾向がある。

次に對聚落位置別の佛閣の數を見ると次の樣である。

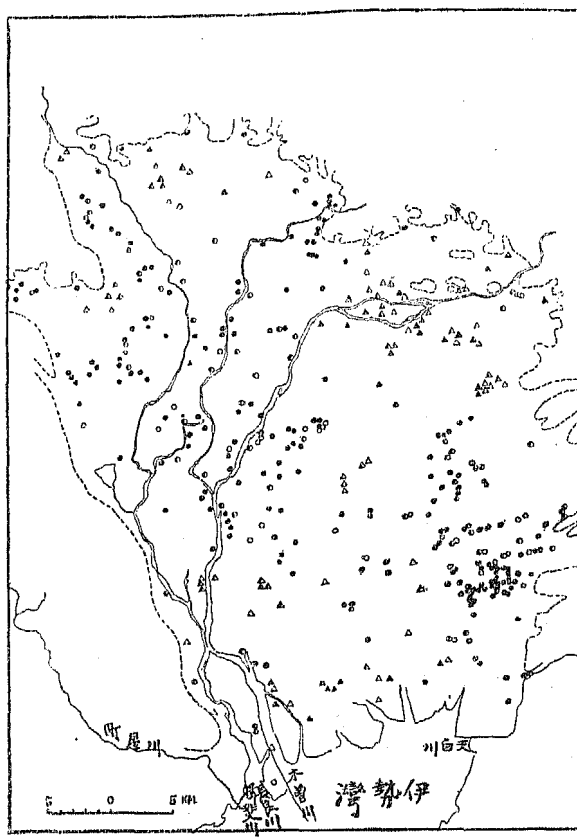
（第二表）

第一型	六一四個	六四％
第二型	二六四個	二八％
第三型	七八個	八％
計	九五六個	一〇〇％

第一型が神社の場合とは逆に多數である事は注意すべき事實である。同時に第三型の著るしく少數な事實は之を概言するならば、佛閣は聚落の内部に包含される傾向にあると云ひ得るで

第三圖

三角點神社、圓點佛閣、兩者共聚落に對する位置上黑點内在型、半黑點緣邊型、圏點離隔型を示す。



あらう。此れに關しての種々の說明は之を避けて、他日に保留して置かうと思ふ。そして此所では單に佛閣の第三型には（稀には神社の第三型も）所謂、荒廢村落を意味して居る場合があるかも知れない事を附記するに止めよう。

四、神社と佛閣との分布上の異同

本節に述べる事は前述した所と多少重複する嫌ひがあるが、記載の便宜上からさうなつた事と、今一つは此の小文が濃尾平野に關しての研究で他の地域と充分な比較がなされてゐないと云ふ事に就て御諒承を得たい。

一、濃尾平野に於ける神社の分布と並に佛閣の其れとが共に長良川を境として、二大群團をなして分布してゐる。今假りに長良川以東と並に以西の兩平野の分布狀態を示せば次の樣である。（第三表）

二、總數に於て佛閣の方が一七三個多い。此れは佛閣總數の約一七%に當る。

三、神社ではI型II型III型の順に漸次多く佛閣は其れと反對にIII型II型I型の順になつて居る。佛閣ではI型がIII型の約八倍もあるのに、神社では僅かに其のIII型がI型の一・二倍に過ぎない。然し事實神社のII型の中には聚落から百米未滿の距離に分離して居るものが佛閣の二型の同種のものに比して甚だ多い樣であるから、結局に於て次の樣に言ひ得られる。神社は聚落から分離して、及び佛閣は聚落內部に夫々分布する傾向が有る。此れを「社寺の對聚落位置の傾向」として認める事が出來る。

（第三表）

型	佛閣			神社		
	西	東	計	西	東	計
I	210	404	614	49	192	241
II	57	207	264	93	155	248
III	7	71	78	70	224	294
計	274	682	956	212	571	783

四、佛閣の第三型が西部平野に極めて少い事

五、佛閣は都市（城下町）では集合し農村では散在の傾向あるに反し、神社は都市農村何處でも散在して居るが佛閣程普遍的に分布せず、地

域的に分布密度により大きな差がある。

六、社寺の分布は人口密度を反映する事が屢々あるが必ずしも左様とは云ひ得ない場合がある。

次に神社と佛閣とが相對的に何れが多く分布するかを地域的に表現しようとして、五萬分の一地形圖上で社寺の最短直距離に在る一對づつを順次近いものから消去する方法を試みた。消去される一對の社寺の直距離は初め一粁以内と云ふ事にしたが其れでは地域性が鮮明に出なかつたので、改めて二粁以内としたら大體其の目的を達する事が出來た、此の方法に於て消去距離の限界は斯の樣に實際に直面して決定するのを妥當と考へるのである。第三圖は即ち此の消去法に依つて作製したものである。此の圖に於ては少くとも三つの注意すべき結果を得た。

一、名古屋市及其の北方の地域に佛閣の分布地域が在る事。

二、名古屋から大垣に到る幅約十二粁の濃尾平野を北北西、南南東に縱走する地帶に佛閣が分布する事。

三、伊勢灣岸地方並に犬山扇狀地が神社分布地域になつて居る事。

第一項に就ては前に一言したから略し、第二項に對しては此の佛閣分布地帶の中に、熱田、清洲、起、及び關ヶ原を連ねた舊街道が在る事に注意して置かうと思ふ。更に此の分布地帶が佛閣の實際的分布(第二圖)とは殆んど無關係に存在する事は一つの興味ある事實である。第三項に就ても實地踏査がしてないが恐らく聚落發達史と無關係ではないと信ずる。

次に第三圖上に於て尾張の平野の中でも最も早くから文化の進んでゐたと思はれる。一宮、清洲兩地の中間の地域に神社佛閣の兩者が共に少いのは一見奇とも思はれるが、第一圖及び第二圖に示す樣に實際的分布は非常に多いのである。此の地域では比較的古い時代から文化の中心であつただけに佛閣の數が多く、又一方に於

て此の地方の農耕地としての開拓と祭神とは離れる事のできない關係にあつた事から自然神社の數も多い爲めに社寺相互に消去法によつて打消されて居る結果である。

五、附　說

比較的新らしい歷史を有する聚落では、社寺の分布が如何樣になつて居るかを知り度いと思つて、二種類の地域を選んだ。其の一つは北海道と樺太との一部であり、他は沿海干拓地としての兒島灣北岸並に有明海北岸である。此所には其の大體の傾向に就て一言して置き度いと思ふ。

樺太では鈴谷川平野の主要部と思はれる留多加・豐原及び小沼の三圖(何れも五萬分一)をみると、寺は留多加町に三つ、豐原町に五つ、及び並川(街村にて長さ約二粁半)に一つある。以上三市街地の中、留多加では寺が神社よりも二個多く豐原では一個多い。右市街地以外には寺は見當らず、豐原の北方にある小沼には寺がない。此の三圖中に入り來る神社の總數は二十二、寺の其れは九であつて、村落には神社のみの分布が見られる。

北海道では旭川・當麻の二圖で按ずるに、寺二十八、神社三十三で神社の超過である。市街地には佛閣が相對的に多く、村落では社寺數が平衡狀態に在り、唯、當麻の東南方ペーパン川流域(上川平野の山間への彎入部)では神社のみが六個も記入されて居る。

右の諸地方からの實例に依つて見ると、北海道と樺太とでは一定の傾向の有る事を類推する事が許されるかも知れない。即ち、聚落發生後間も無く神社が建立され、聚落と神社とは若干の時間的間隔を以て相伴ふ(I)(此の發達過程をIとする。以下II、IIIの場合も同上)部落の人口が漸次增加して市街化して來るか(II)又は市街化しなくとも大きい人口集團をなすに到つて(II)佛閣が作られる樣になる。

北海道では旭川其他の市街地がII、他の上川

平野の村落部はII′、上川平野周縁の平野彎入部ではIの狀態に在るに對し、樺太の市街地ではII乃至II′、其他の鈴谷平野の村落ではIの狀態に在るのではないかと考へられる。

次に兒島灣岸及び有明海岸の一部を觀るに、此等內地（北海道を其の實質上準植民地と考へる）の新聚落は、植民地（北海道並に樺太）のものと異つた點の有る事に氣が附く。

岡山南部圖幅（五萬分一）でみると、寺は岡山市內に十七（內在的位置を占める寺）神社は東郊丘陵上のものを除けば、岡山神社一個が在るだけで岡山市は寺の多い町である事が解る。岡山市以外では同市南方の平井村（市街地化して居る）及び其の附近に五つ、笹瀨川口に三個有る。同圖幅上（兒島半島先端部を除き）寺三十五に對し、神社三十四で殆んど相等しいが、旭川と笹瀨川との兩河間の村落では寺四に對して、神社二十あり、笹瀨川右岸でも寺二つに對し、神社七となつて居る樣に、村落部では相對的に神社が多い。

次は有明海北西岸五萬分一、武雄・鹿島の二圖幅に眼を轉ずる事にする。便宜上此所では、長崎本線と有明線とで限られた沿海地方を檢べると、寺四十四に對し、神社五〇で、神社の方が稍多くなつて居る。社寺相互に消去法を適用すると、牛津川以東、佐賀川以西の平野では、北部に神社、中部に寺、南部（沿海地方）に神社が相對的に多い事を知る。牛津川と六角川との間では社寺共に極めて少く（丘陵緣上の社寺を論外）其の理由は地形圖を一瞥すれば瞭然である。六角川以南では社寺數が互に平衡狀態に在る。然し、海岸に最近距離の社寺を海岸に沿つて求めると嘉瀨川口から濱川口迄の間、即ち有明海の北西岸一帶には全く神社の連鎖が有る事を知る。

最後に五萬分の一、大牟田圖幅をみるに、寺十九に對して、神社は六十三あつて著るしい差である。十九の寺の中、九は柳河町（但し柳河

町北の少部分は此圖にあらはれて居ない)。此の圖幅の社寺に前述の消去法を行ふと、柳河町のみが寺の地域となるのみで、他は盡く神社の地域となつて了ふ。

右兒島・有明兩海灣岸では(但し前掲地形圖の示す範圍で)神社が佛閣よりも多く、此の點は伊勢灣北岸地方の場合に類似して居る。然るに沿海地方に於てさへ、佛閣の混入の少くない事は、伊勢・兒島、並に有明の三灣岸共通の現象である。

武藏野に於ける替地開墾による農村の如きでは、當初の地割を行ふと同時に佛閣の敷地が割當てられてゐた。そして神社は其れ以後に建設されてゐる。歴史的に同一の宗派關係にあつたものが集團移住をする場合には、聚落發生と同時に寺を必要とする筈である。然し武藏野の寛文年間の上述の聚落が此の關係に在つた事を直ちに立證する事は出來ない。既述した上川平野のペーパン川流域では、地形圖によつて觀ると福島團體・宮城團體、及び越中團體等の地名の示す樣に、團體移住が行はれたらしいが寺は一つも見當らない。此等の諸點は其の內容の檢討に俟つより他に方法がない。

以上不充分な記載に終つた觀があり、特に形態に重きを置き過ぎた事は最初にも斷つた通りで、將來日を改めて御叱正を仰ぎたいと思つてゐる。尙、五萬分の一地形圖上でなした獨自の研究方法に就ては方法論的吟味を要するであらうが此れも省略し、只管先輩各位の御批判を待つ次第である。(一九三六・二・六)

新著紹介

○新疆よりゴビ沙漠を橫ぎる

南滿洲鐵道株式會社
昭和十年十一月發行

本書も亦露國經濟調査會員ネダーチン夫人とネダーチナとの著述で一九一七年より一九二八年に於て新疆西北部より寧夏をへて歸綏に至る旅行記及び新疆並にゴビ沙漠橫斷記である、旅行した地圖があり寫眞も出てゐる荒凉な新疆にも美はしい市街もあれば景色もある文章も讀みやすい、六、七月の